

国際交流員のコラム

●奄美大島で大自然と伝統の響きを探る Part. 2●

—鹿児島県国際交流員 鄧麗霞（中国出身）—

前回 196 回の続き・・・

3 日目は、奄美博物館、奄美海洋展示館、奄美野生生物保護センター、奄美観光ハブセンターを訪問し、奄美の歴史・文化・自然について学びました。

奄美博物館は奄美群島唯一の総合博物館として見所が多かったです。

入館してまず、1 階のホールで奄美の自然を紹介するビデオを見ました。

そこで不思議な海底のミステリーについて勉強しました。右写真の幾何学模様は奄美大島の沖合の海底に出現し、「海底のミステリーサークル」として 20 年以上前から知られていましたが、誰がどんな目的でつくったものなのか、その正体はずっとわからないままでした。しかし 2011 年に水中写真家の大方洋二氏が、このミステリーサークルをつくる小さなフグの撮影に成功し、このミステリーサークルは奄美ホシゾラフグのオスがメスにアピールするために、精巧に建築した産卵巣ということが明らかになりました。



2 階では『南島雑話』が展示されており、幕末ごろの奄美大島の暮らしの挿絵を閲覧し、奄美の近代史を勉強しました。3 階では奄美大島に暮らす人々の 1 年を自然の変化に着目しながら、月ごとにまとめて展示していました。

奄美博物館の資料展示を通じて、奄美の文化は日本文化を基盤にし、琉球や薩摩の影響を受けながら独自に発展してきたことを理解しました。

奄美海洋展示館は、水族館のようで、奄美の海の生き物であるサンゴの生態、ウミガメ、エビ、カニ、魚、貝を見ることができ、さらにサンゴや砂、貝殻を使ったワークショップ体験もできます。



貝殻で作られた工芸品

展示館外のテントで軽い食事を取り、近くの大浜海浜公園も散策することができました。



大浜海浜公園の様子

その後は、奄美野生生物保護センターへ行きました。保護センターでは、奄美群島の昆虫や鳥獣の標本の展示に加え、奄美の貴重な生物に対する保護増殖事業も紹介されています。ここで奄美マングース防除事業のことを勉強しました。マングースはもともと中東から南アジアに生息する哺乳類で1910年にハブなどの駆除のためにインドから沖縄に連れてこられました。奄美大島には、1979年に沖縄から運ばれた数十頭が放されたとされています。しかしマングースはハブの天敵とはならず、代わりに「アマミノクロウサギ」など奄美大島に生息する多くの動物を捕食することになってしまいました。そこで、環境省は2000年に本格的なマングース駆除に着手し、2005年からは「奄美大島からのマングース完全排除」を目標に、外来生物法に基づく防除事業を進めていましたが、2024年9月に根絶が宣言されました。奄美の豊かな自然や貴重な野生生物を未来へと受け継いでいくための取り組みが、奄美野生生物保護センターを通じて感じられました。



黒ウサギの仮剥製



フィリピンマングースの仮剥製

野生生物保護センター見学後は、近くにある大和浜の群倉の見学に行きました。奄美には穀物を貯蔵する独特の木造建築である高倉があります。高倉は脱穀した粳や翌年に使う種粳をネズミ被害や湿気、太陽熱から守り、保管するために使われていました。群倉とは家から離れた場所にこの高倉が集められて建てられていることを言います。大和浜の群倉は2004年に鹿児島県の建造物文化財に指定されました。



大和浜の群倉

最終日は、まず奄美自然観察の森を訪問しました。奄美自然観察の森の中は遊歩道が整備されており、茂った亜熱帯の植物の中で鳥や蛙など数多くの生き物の鳴き声が聞こえました。展望台からの景色も非常に印象的で、煙雨に包まれた遠くの山々は水墨画のような趣がありました。さらに、エメラルド色の海に囲まれており、まるで仙境のように見えました。



自然観察の森にある展望台からの眺め

空港に向かう前に、大島紬村にも立ち寄りました。大島紬村は、南国の亜熱帯植物庭園の中にあります。ここでは、本場の奄美大島紬の製造現場を見学したり、泥染めなどの体験ができる場所です。私たちが視察している間も外国人観光客が次々と訪れていました。大島紬関連の施設や商店街では、着物以外にも帽子やポーチ、バッグ、ネクタイなど、さまざまな商品が開発されているのを見ることができました。大島紬村にも、オリジナルの高級大島紬や紬小物商品、お土産品など多数の大島紬に関連する商品が取り揃えてありました。



池で泥染め作業中の職人さん



観光客で賑わっている泥染め技術保存館



泥染めの工程を通訳している康上先生

最後に用安海岸の露天席があるレストランで、島ヤギのスープカレーをいただきました。ヤギのお肉がカレーと絶妙に絡み、ローケーションも相まって大満足のひとときを過ごすことができました。

大島紬の機織りの音が、何百年もの時を超えて今も工房に響き渡っているように、奄美で感じた穏やかで力強い命の営みが、私の胸の中で今も響いています。

●鹿児島県での生活を振り返って●

5月末をもって中国へ戻ります。あっという間の1年間でしたが、鹿児島でさまざまな学びや経験を積むことができ、とても充実した1年でした。国際交流員としての勤務の終わりは、新たなスタートへの一歩だと思います。鹿児島での出会いを大切に、これからも頑張っていきたいと思います。本当にお世話になりました！ありがとうございました。